

心と言葉のグローバル日本語文法 入門

SAMPLE

成瀬由紀雄

目次

はじめに.....	4
【要約】.....	4
日本語とは.....	5
【要約】.....	5
日本語と日本人.....	5
日本語は「人の視点」が中心の言語.....	6
日本語は「場」が中心の言語.....	6
日本語の文.....	7
【要約】.....	7
日本語文の3種類の基本構造.....	7
複眼的な考察.....	8
3つの視点.....	8
日本語の世界.....	8
(1)「人・共同の視点」による文の基本構造.....	9
日本語の基盤をなす「人・共同の視点」.....	9
「人・共同の視点」の長所と短所.....	10
「人・共同の視点」の文章例.....	11
(2)「天・共同の視点」による文の基本構造.....	12
日本語の理知的基盤としての「天・共同の視点」.....	12
「天・共同の視点」の文章例.....	13
(3)「天・個の視点」による文の基本構造.....	14
「伝統的」基本構造から「欧米的」基本構造へ.....	14
欧米的日本語文法としての国文法.....	16
「天・個の視点」の文章例.....	16
「は」「がをにの」認識.....	18
【要約】.....	18
「がをにの」は、日本語の要（かなめ）.....	19
「がをにの」研究の歴史.....	20
学校国文法モデルでの「がをにの」の扱い方.....	21
「～は」.....	22
「～が」.....	27
「～を」.....	32
「～に」「～へ」.....	34
「～と」.....	35

「～で」.....	36
「～から」「～より」	37
「～の」.....	38
演習問題.....	40

はじめに

【要約】

- 日英・英日翻訳者にとっての最大の課題は翻訳理論・技法ではない。日本語文法力と英語文法力である。
- だが英語文法力はともかくも、ほとんどの人が日本語文法の十分な学習をしていない。母語の文法を十分に知らずして翻訳などできるはずもない。
- 「心と言葉のグローバル日本語文法 入門」は、心の働きを翻訳するために考案された唯一の日本語文法である。これを利用することによって、心と心をつなぐ訳文をつくりだすことが可能になる。

☆☆☆

日英・英日翻訳者にとっての最大の課題は翻訳理論・技法ではない。日本語文法力と英語文法力である。翻訳の基盤となるべき日本語文法力と英語文法力が十分ではないために翻訳理論・技法を習得してもそれを十分生かすことができないケースが数多くみられる。これは本当にもったいないことである。

英文法の学習については誰もがそれなりにおこなっていることだろう。しかし日本語文法についてはどうだろうか。ほとんどの人が十分な学習をされていないのではないか。母語の文法を十分に知らずして翻訳などできるはずもない。

「心と言葉のグローバル日本語文法」入門』は、従来の文法とはまったく異なり、心の働きを翻訳するために考案された唯一の日本語文法である。これを利用することによって、心と心をつなぐ訳文をつくりだすことが可能になる。

本書を読み、トレーニングをしっかりと積みば、皆さんの日本語力が大きく向上することをお約束する。

成瀬由紀雄

日本語とは

【要約】

- 私たち日本人は日本語の文法や文章の書き方/作法について学ぶ機会がほとんどない。私たちは日本語に関する訓練を受けることなく、ただなんとなく日本語を話し、なんとなく日本語を書いている。
- 自分の言語もまともに知らないのに他人の言語のことなどわかるはずもない。私たちはなによりもまず日本語をよく知るべきである。
- 「和」の日本語は「人の視点」から世界を捉える傾向がきわめて強い。また、この世界を実体の集合体とはみなしていない。世界はひとつの「場」であり、実体はそのなかの要素にすぎない。

☆☆☆

日本語と日本人

日本語がどのような言語かを外国人にうまく説明できるかと問われて「はい」と自信をもって答えられる日本人はそれほど多くないのではないだろうか。

私たちは日本語を使って生活しているが、その日本語についてしっかり学んだ経験がない。学校の国語という教科は基本的に表現の仕方や文学などを学ぶものであり、日本語という言語そのものを学ぶものではない。中学や高校では国文法も学ぶが、それが役に立っていると思っている人はほとんどいないことだろう。文章の書き方や作法についても学ぶ機会がほとんどない。私たち日本人は日本語に関する訓練を受けることなく、ただなんとなく日本語を話し、なんとなく日本語を書いているのである。

これは深刻な問題である。コミュニケーションの重要性が強く認識され、グローバルコミュニケーションのツールとしての英語の必要性が声高に叫ばれている昨今だが、日本人の場合、そのグローバルコミュニケーションの基盤であるべき母語についての正しい理解がほとんどできていないのである。自分の言語もまともに知らないのに他人の言語のことなどわかるはずもない。

まず日本語をよく知るべきである。日本語の正しい姿を理解することだ。幸いなことに日本語の研究が進み、これまでわかっていなかった日本語の姿もわかるようになってきた。以下、そうした日本語研究の成果も取り入れながら、日本語という言語の概要について説明したい。

日本語は「人の視点」が中心の言語

日本語は「人の視点」から世界を捉える傾向がきわめて強い言語である。その地理的条件から他民族という「他者」が身近におらず、その視点を自分から視点を離して天に昇らせる必要がなかった。その結果「身内」とも呼ぶべき人間とのあいだに設定した「場」のなかでの細やかな心の交流を言語表現として発達させてきた。

日本語は「場」が中心の言語

欧米人と異なり日本人はこの世界を実体（entity）の集合体とみなしていない。世界はひとつの「場」であり、実体はそのなかの要素にすぎない。場が主役であり、実体は脇役だ。

「場」は、様々なレベルで設定されるが、いずれの場合も調和がなによりも大切である。日本語では場のなかで他との調和がとれていないことがもっとも嫌われる。これが「場違い」である。

場のなかの誰もが知っていることについては、日本語では述べる必要がない。そのため、欧米的発想でいうところの「省略」手法が多く用いられる。だが実際にはこれは「省略」ではない。「省略」とは述べるべきことを省くことだが、日本語の場合はもともと述べる必要がないのだ。逆に表現してしまえば、くどくなったり、ときには別の意味が加わったりもする。

時間に対する認識も、欧米語とは本質的に違っている。欧米語では時間を現在から過去と未来に伸びる一直線と捉える。日本語では時間を物理的なものだけではなく、人間の心のなかにあるものとも捉える。物理的に未来であっても、心理的に終わったことと捉えれば終わったこととして表現するのである。

ただし、上に述べたような伝統的な日本語の世界認識方法にくわえて、明治以降の日本語は西欧的な世界認識方法を積極的に移植してきた。そのため、私たちがいま用いている現代日本語は伝統的な日本語の認識と西欧的な認識とを併せ持つ「ハイブリッド」型になっている。日本語のように極度にハイブリッド化した言語は世界でも珍しい。

日本語の文

【要約】

- 日本語の文には3種類の基本構造を考えることができる。「人・共同の視点」による文の基本構造、「天・共同の視点」による文の基本構造、「天・個の視点」による文の基本構造である。
- 日本語の文に3種類の異なる基本構造が考えられるのは、日本語が世界に稀な融合文明の産物だからである。
- こうした複眼的な視点からの考察は統一理論を目指す西欧的な分析のあり方とは異なるものであるが、日本語の本質を見抜くには複眼的な視点からの考察が必要不可欠である。
- 「人・共同の視点」は日本語の基盤をなすものである。「人・共同の視点」での世界認識では自他は一体化する。その結果、他者の世界観、思考、感情を自分のものとして理解し、感じることができる。このことが日本人に他者に対する深い理解と思いやりを生じさせている。だが自他を一体化することは自他を明確に区別できないことでもある。「人・共同の視点」での世界認識では「自己」の確立がきわめて難しい。日本人が個人としての意識が弱い原因のひとつは、ここにある。
- 「天・共同の視点」では、視点を自分から離して天に上らせることで大所高所からの広い視野を獲得できる。自分から離れるので情意的な理解は薄れ、理知的な理解の側面が強くなる。古代から日本の知識階層は、この視点を通じて日本語を使ってきた。
- 明治期になって欧米の文明を輸入する際、日本の学者たちは、日本語の認識を欧米語に合わせて変える道を選んだ。日本語の「てにをは」を欧米語の「主語」「目的語」「補語」「修飾語」などに対応させた。これが「天・個の視点」による文の基本構造である。西欧文明を吸収するための、ある意味で苦肉の策ともいべきものである。

☆☆☆

日本語文の3種類の基本構造

日本語の文には3種類の基本構造を考えることができる。「人・共同の視点」による文の基本構造、「天・共同の視点」による文の基本構造、「天・個の視点」による文の基本構造である。

1. 「人・共同の視点」による文の基本構造
2. 「天・共同の視点」による文の基本構造
3. 「天・個の視点」による文の基本構造

複眼的な考察

日本語の文に3種類の異なる基本構造が考えられるのは、日本語が世界に稀な融合文明の産物だからである。日本文明は「和」「漢」「洋」の3つの文化を併せ持っている¹。町には神社とお寺と教会が並び立ち、日本人は洋服を着て畳の部屋で中華料理を食べている。書物には漢字と仮名とローマ字が混在している。このように複数の文化が高度に融合化された文明の言語を考察するには、ひとつの視点からだけでは十分ではない。いくつもの視点からの考察を積み重ねることで、その本質に迫ることができる。

こうした複眼的な視点からの考察は統一理論を目指す西欧的な分析のあり方とは異なるものである。西欧的な学問のあり方は「神の視点」からの世界認識を基盤としており、この視点からの分析が近代科学を生み出した。だがそれは日本語の考察には向いていない。日本語の本質を見抜くには複眼的な視点からの考察が必要不可欠である。

3つの視点

「人・共同の視点」「点・共同の視点」「天・個の視点」の概要について述べておく。詳しくは「言語解説編（1）言語・思考・認識」をみていただきたい。

視点として「人の視点と天の視点」「個の視点と共同の視点」のふたつの座標軸を設定する。

「人の視点と天の視点」の人の視点では、我々は人間の地上の視点から世界をみている。天の視点では、上から鳥瞰的に世界をみている。ここでは「主観的」「客観的」という語はできるかぎり使わない。別の価値観が付随されるからである。

「個の視点と共同の視点」の個の視点では、話し手/書き手と聞き手/読み手は別々の視点から世界をみている。共同の視点では、話し手/書き手と聞き手/読み手は同一の視点から世界をみている。共同の視点では自他の区別はなく一体化している。

このふたつの座標を交差させると、4つの領域ができる。（1）「人・共同の視点」、（2）「天・共同の視点」、（3）「天・個の視点」、（4）「人・個の視点」である。

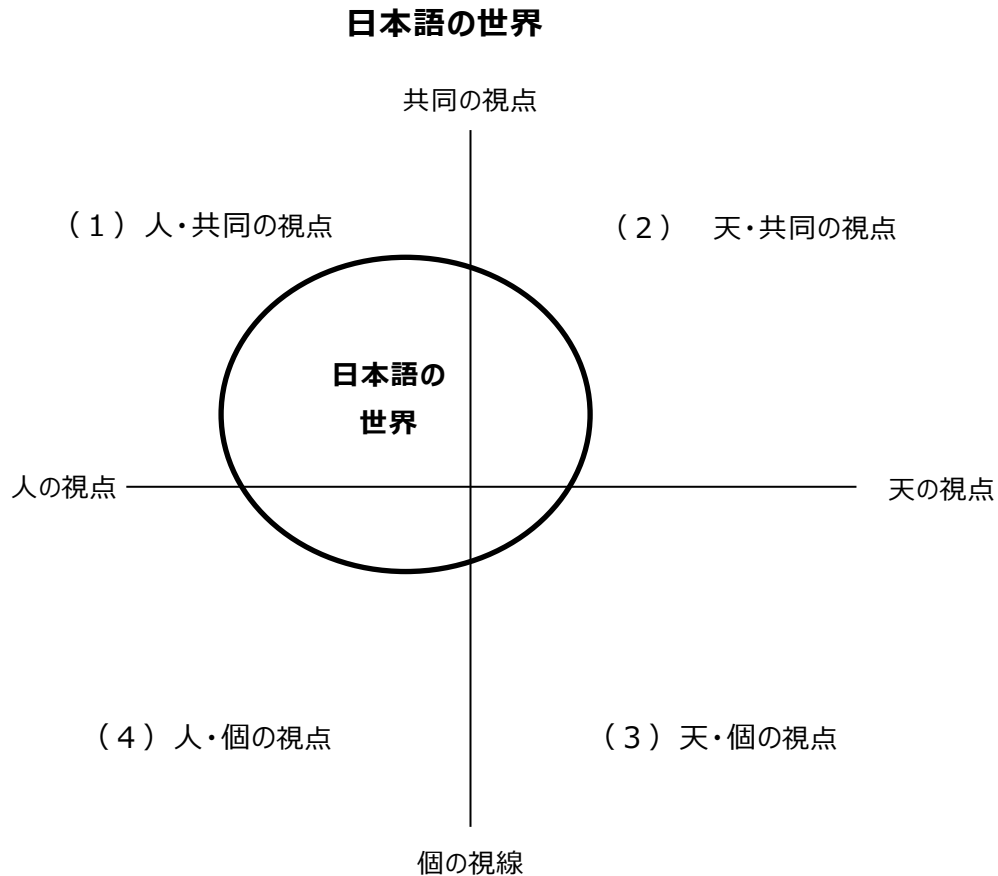
日本語の世界

日本語での視点のあり方は（1）の「人・共同の視点」を基盤とするが、（2）「天・共同の視点」、（3）「天・個の視点」も併せ持っている。なお、（4）の「人・個の視点」は、例えば芸術家の視点である。そこでは他者とは異なる独自の世界がみえている。その言語も一般的な他者には理

1 なぜ日本語が「和」「漢」「洋」の3つの文化を併せ持つようになったかについては、「心と言葉のグローバル日本語文法」の「附章：日本語の歴史・音韻・語彙」の「1.日本語の歴史」を見ていただきたい。

解しがたいことが多いが、そこに独自の価値があるともいえる。

以上を図にすると以下の通りである。



以下、(1)「人・共同の視点」による文の基本構造、(2)「天・共同の視点」による文の基本構造、(3)「天・個の視点」による文の基本構造を順に説明する。

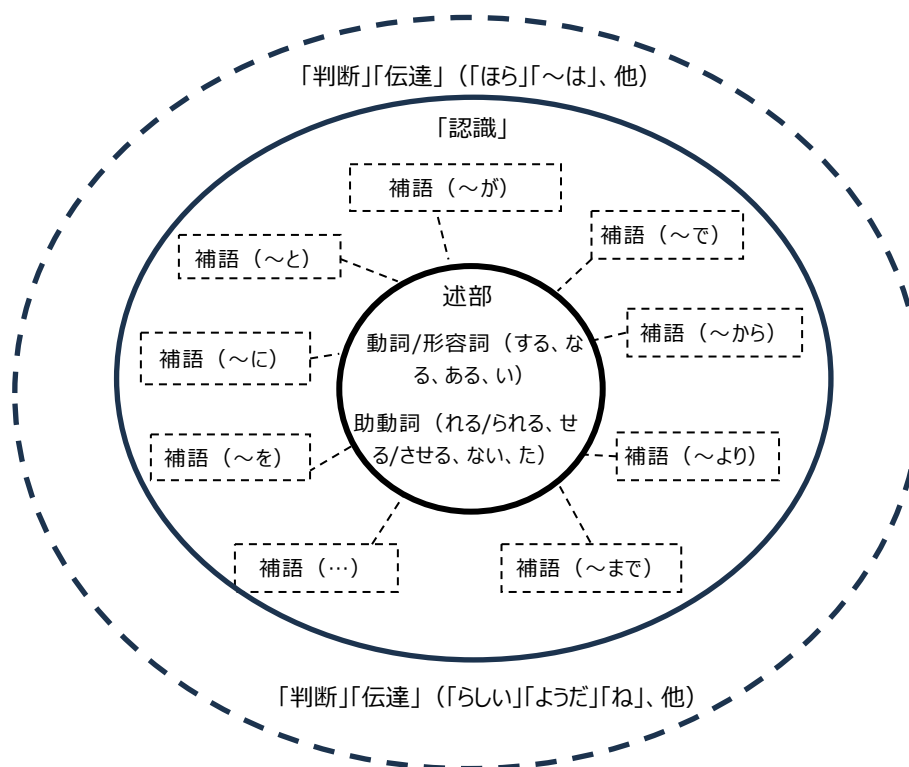
(1) 「人・共同の視点」による文の基本構造

日本語の基盤をなす「人・共同の視点」

「人・共同の視点」は日本語の基盤をなすものである。古代から日本人は相手と同じ視点で言葉を理解してきた。相手の視点を自分の視点と一体化させ、相手がみえる世界を自分の世界として捉えてきた。そこに自他の区別はなく、世界認識はひとつのものとして融合される。

「人・共同の視点」による文の基本構造を図示すると、以下のようになる。

「和・漢・洋」の「和」（人/共同の視点）による「文」の基本認識構造



我々が実際にみている世界を真正面に据えたイメージ図である。話し手/書き手は手前側から向こう側へと視線を送っている。それと同じ視点から聞き手/読み手も世界をみている。話し手/書き手と聞き手/読み手は世界の認識において一体化している。

この世界認識の中心にあるのはコトである。この世界にはなんらかのコトが起こっており、それに付随するモノや状況がある。そのモノや状況のタイプは格助詞（てにをは）によって規定される。ただし中心にあるのはあくまでコトなので、そうした付随的なモノや状況については必要がなければ表現しない。

「人・共同の視点」の長所と短所

「人・共同の視点」での世界認識では自他は一体化する。その結果、他者の世界観、思考、感情を自分のものとして理解し、感じることができる。このことが日本人に他者に対する深い理解と思いやりを生じさせている。

だが自他を一体化することは自他を明確に区別できないことでもある。「人・共同の視点」での世

界認識では「自己」の確立がきわめて難しい。「自己」とは自分とは完全に切り離された「他者」の存在を明確に意識することによって確立されるものだからである。日本人が個としての実存意識が弱い原因のひとつはここにある。

「人・共同の視点」の文章例

「人・共同の視点」中心の文章例を挙げておく。ひとつめの例は、清少納言の『枕草子』である。作者は自分のありのままの視線から世界を捉えており、読み手である我々も作者と一体化してその視点で読み進めていく。

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎは少し明りて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は、夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くも、をかし。雨など降るも、をかし。

秋は、夕暮れ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。まいて、雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音(ね)など、はた言ふべきにあらず。

冬は、つとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、わろし。

(清少納言、『枕草子』)

ふたつめの例は、夏目漱石の『吾輩は猫である』である。猫の視点から世界を捉える文章であるが、読者である我々も猫の視点から世界を眺めることになる。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐いとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものを見始であろう。

(夏目漱石、『吾輩は猫である』)

みつめの例は、林芙美子の『放浪記』である。この文章では出だしから「人・共同の視点」の文

章が続き、最後の「私は涙があふれていた。」で視点が「天・共同の視点」へと切り替わる。この転換に文体としての魅力が生まれている。

海が見えた。海が見える。五年振りに見る尾道の海はなつかしい。汽車が尾道の海へさしかかると、煤けた小さい町の屋根が提灯のように、広がって来る。赤い千光寺の塔が見える。山は爽やかな若葉だ。緑色の海向うにドックの赤い船が、帆柱を空に突きさしている。私は涙があふれていた。

(林芙美子、『放浪記』)

よつめの例は、斉藤茂吉の『赤光』のなかの短歌であるが、これは「人・共同の視点」と「天・共同の視点」とを重層的に含んだものである。

のど赤き
玄鳥（つばくらめ）ふたつ
屋梁（はり）にゐて
足乳根の母は
死にたまふなり
斉藤茂吉、『赤光』

この句では茂吉の視点は自分にあるとともに天高くにもある。「人・共同の視点」と「天・共同の視点」の両方から自分と母、そして屋梁にいる 2 羽のつばめをみている。日本の優れた詩歌では、このように重層的な視点を持っているものが多い。

（２）「天・共同の視点」による文の基本構造

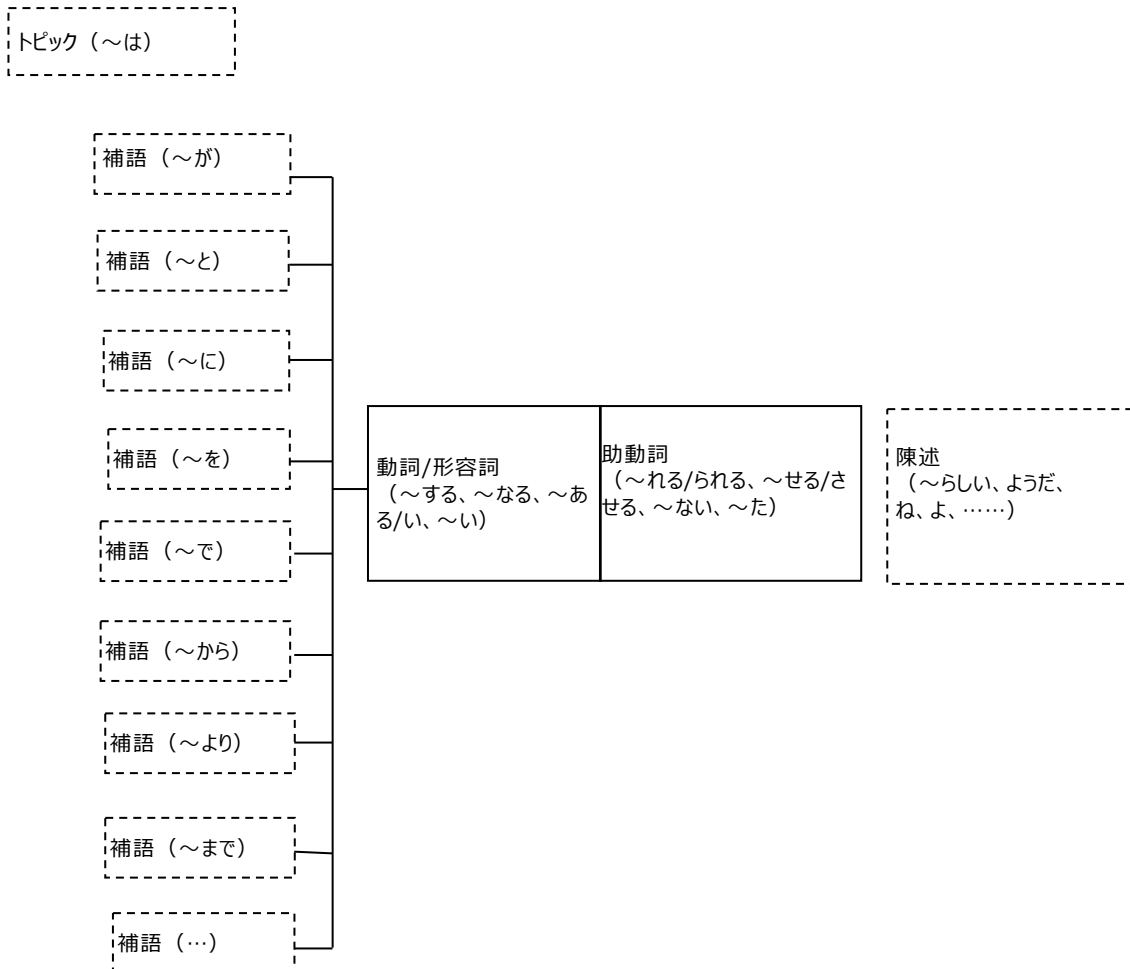
日本語の理知的基盤としての「天・共同の視点」

「人・共同の視点」による世界認識は日本語の基盤をなすものだが、しかし、その視線が届くのは身のまわりにかぎられる。身近なモノ/コトに対するきめ細やかな理解はできても、広い視野からの大局的な理解をおこなうことはできない。

「天・共同の視点」は、そうした「人・共同の視点」の欠点を補うものである。視点を自分から離して天に上らせることで大所高所からの広い視野を獲得できる。自分から離れるので情意的な理解は薄れ、理知的な理解の側面が強くなる。古代から日本の知識階層は、この視点を通じて日本語を使ってきた。

「天・共同の視点」による文の基本構造を図示すると次のとおりである。

天・共同の視点による文の基本構造



含まれる要素は「人・共同の視点」と同じだが、それを話し手/書き手の視点からみるのではなく、天に上らせた視点からみたイメージ図である。

「天・共同の視点」の文章例

「天・共同の視点」の文章例を挙げておく。ひとつめは、鴨長明の『方丈記』である。この文章では京都に起こった大火災の様子を天・共同の視点から述べている。

いにし安元三年四月廿八日かとよ、風烈しく吹きてしづかならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來りていぬゐに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部の省まで移りて、ひとよがほどに、塵灰となりきに。火本は樋口富の小路とかや、病人を宿せ

るかりやより出で来けるとなむ。吹きまよふ風にとかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如くすゑひろになりぬ。遠き家は煙にむせび、近きあたりはひたすらほのほを地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じてあまねくれなゐなる中に、風に堪へず吹き切られたるほのほ、飛ぶが如くにして一二町を越えつゝ移り行く。

(鴨長明、『方丈記』)

ふたつめは、芥川龍之介の『羅生門』である。ここでも視点は天へと上り、我々は作者とともに下界をみている。

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男のほかには誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。(略)

その代りまた鴉がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷗尾のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。——もっとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

(芥川龍之介、『羅生門』)

(3) 「天・個の視点」による文の基本構造

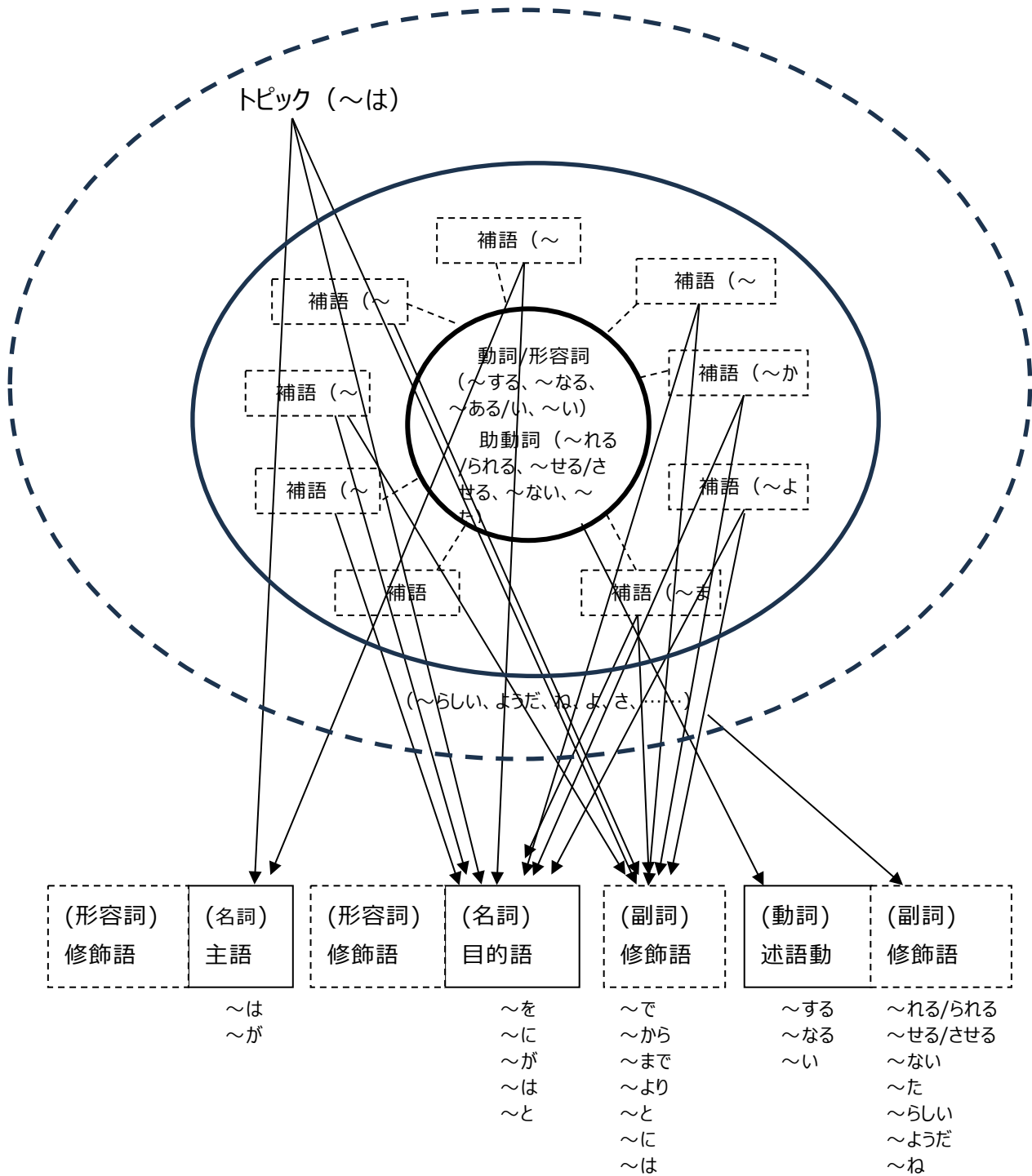
「伝統的」基本構造から「欧米的」基本構造へ

明治期になって欧米の文明を輸入する際、日本の学者には欧米の書物を翻訳する必要が出てきた。ところが英語を含む欧米言語は「天の視点」を中心とする言語であり、「人の視点」を中心とする日本語と世界の認識のあり方がまったく違っていた。また、近代欧米社での世界認識と思考のあり方は「個の視点」がきわめて強く、その一方で「共同の視点」に関してはきわめて低い評価しか与えないという特性も持っていた。

そこで彼らは日本語の認識を欧米語に合わせて変える道を選んだ。日本語の「てにをは」を欧米語の「主語」「目的語」「補語」「修飾語」などに対応させたのである。具体的には、主語 (Subject) に対して「～は」「～が」など、目的語と補語に対して「～を」「～に」「～が」「～は」

「～と」など、修飾語に対しては「～で」「～から」「～まで」「～より」「～と」「～は」などをあてはめた。

伝統的基本構造から欧米的基本構造へ



そこで日本の学者たちは日本語の伝統的な基本構造を欧米的な基本構造に対応させるべく、文の各要素を一直線上に並べかえた。こうすることで世界を認識する視点を「主観」から「客観」へと切り替えることができ、同時に欧米的な「個」というものも確立ができると考えた。

これが、「天・個の視点」による文の基本構造である。近代西欧文明を吸収するための、ある意味で苦肉の策ともいべきものであった。

「天・個の視点」による文の基本構造

(形容詞) 修飾語	(名詞) 主語	(形容詞) 修飾語	(名詞) 目的語	(副詞) 修飾語	(動詞) 述語動詞	(副詞) 修飾語
	～は ～が		～を ～に ～が ～は ～と	～で ～から ～まで ～より ～と ～に ～は	～する ～なる ～い	～れる/られる ～せる/させる ～ない ～た ～らしい ～ようだ ～ね

欧米的日本語文法としての国文法

このようにして明治期に欧米的な日本語の文ができあがった。これが「天・個の視点」による文の基本構造である。

この「天・個の視点」による文の基本構造をもとにしてつくられているのが、「国文法」である。すなわち国文法とは、日本人がつくったものではなく、英文法の翻訳版である。そして国文法と英文法をベースに英語と日本語の構文要素をも対応させたのが、英文和訳という翻訳モデルである。

「天・個の視点」の文章例

「天・個の視点」の文章例を挙げておく。ひとつめは、有島武郎の『カインの末裔』である。

長い影を地にひいて、瘦馬の手綱を取りながら、彼れは黙りこくって歩いた。大きな汚い風呂敷包と一緒に、章魚のように頭ばかり大きい赤坊をおぶった彼れの妻は、少し跛脚をひきながら三、四間も離れてその跡からとぼとぼついて行った。

北海道の冬は空まで逼っていた。蝦夷富士といわれるマッカリヌプリの麓に続く胆振の大草原を、日本海から内浦湾に吹きぬける西風が、打ち寄せる紆濤のように跡から跡から吹き払っていった。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になったマッカリヌプリは少し頭を前

にこごめて風に歯向いながら黙ったまま突立っていた。昆布岳の斜面に小さく集った雲の塊を眼がけて日は沈みかかっていた。草原の上には一本の樹木も生えていなかった。心細いほど真直な一筋道を、彼れと彼れの妻だけが、よろよろと歩く二本の立木のように動いて行った。

（有島武郎、『カインの末裔』）

有島は父の教育方針で4歳のときから米国人家庭で生活し、その後も横浜英和学校、米国ハバフォード大学、ハーバード大学で学ぶなど、きわめて欧米的な教育を受けた。その影響が日本語の文章に色濃く表れている。

ふたつめは、日本国憲法である。

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

（日本国憲法 前文）

日本国憲法はマッカーサーのつくった英文の翻訳版であることから、「天・個の視点」による欧米的な文章としての特性を色濃く持っている。

「は」「がをにの」認識

【要約】

- 「がをにの」は、日本語の要（かなめ）である。格助詞という便利な道具を使って、日本人は古くから外来語を日本語に取り入れてきた。江戸時代までは〇〇や××のところに漢語が埋め込まれていたが、明治期からは漢字やカタカナの姿を借りた西欧語が埋め込まれるようになった。そして明治期での西欧語の埋め込みの尖兵となったのが、翻訳文である。
- 私は、「が」には「が」の、「を」には「を」の、「に」には「に」の、「で」には「で」の、それぞれ独自の「意味」があるものとする。それは「機能的な意味」の根底に共通して存在する「こころの働き」である。そうした最も根底的な部分の「意味」を捉まえず、言語としての機能的な意味だけを分析することに、私は反対である。
- 「は」——「天・個の視点」での「～は」は、翻訳文体における「主語」を指示する。「漢」（天/共同の視点）による「～は」は、「トピック」を決める。「和」（人・共同の視点）による「～は」は、共同でみる「場」を決める。
- 「が」——「～は」と「～が」とは本質的に異なる。「～は」と「～が」が「主語」に対応するから兄弟関係であるといった感覚は、英文法からの借り物である学校国文法によって明治以降に培われたものであり、現代日本語の3つの基本形のうちのひとつとして機能するものの、日本語の本質ではない。「洋」（天/個の視点）による「～が」は「主語」を示す。「漢」（天・共同の視点）からみた「～が」——「主格補語」を示す。「和」（人・共同の視点）からみた「～が」——「視線の行き所」を示す。
- 「を」——「洋」（天・個の視点）からみた「～を」は2つの実体間の影響-被影響の関係性を示す。「和」（人・共同の視点）からみた「～を」は場の出来事に直接関与するものごとを表す。
- 「に」「へ」——「～に」と「～へ」はともに到着点に向かう認識を示している。「～に」には到着点とつながるという認識イメージがある一方で、「～へ」の持つ認識は到着点とつながるかどうかなとは無関係である。
- 「と」——「和」（人・共同の視点）からみた「～と」は、つながりの認識である。モノとモノが「と」でつながることもあれば、モノとコトが「と」でつながることもある。
- 「で」——「和」（人・共同の視点）からみた「～で」は、コトに対する補足情報をそこに置くイメージ。
- 「から」「より」——「和」（人・共同の視点）からみた「～から」「～より」——起点（はじまり）を示す。
- 「の」——ある成分が体言（名詞）へと展叙連体展叙するための唯一のマーカーである。成分を体言（名詞）へと展叙できるマーカーはただひとつ「～の」だけである。ゆえに「～の」はすべ

ての格関係に対応する。

☆☆☆

「心と言葉のグローバル日本語文法」を最初に執筆した時点で私（成瀬）は格助詞に対して「がをにの」ではなく、従来の呼び名にあわせて「てにをは」という呼び方をしていた。だがその後日本語文法学者の三上章の研究成果にあわせて、「てにをは」から「がをにの」という呼び方に変更をした。

この変更には次の3つの重要な意義がある。第1に、「てにをは」という範疇から「は」だけを外して、「は」が「てにを」とは異なる機能を持つことを明確に示したことである²。第2に、格助詞のなかでも「がをにの」が特別な位置を占めている（「は」と置き換わってしまう）ことを明確に示したことである³。そして第3に、「の」が「がをに」と同様に「は」に置き換えられることを明確に示したことである⁴。

下に述べるように「がをにの」とは日本語の要である。ゆえに「がをにの」とは何かを深く理解し過不足なく操れるようになれば、価値の高い日本語の文章が自在につくれるようになる。

「がをにの」は、日本語の要（かなめ）

いわゆる「格助詞」（成瀬注：格助詞の代表格が「がをにの」である。それ以外の格助詞については、一覧を参照されたい）は、まさに日本語の要（かなめ）である。なぜなら、格助詞さえつけられれば、あらゆる言葉は日本語へと変身できるからである。

「Me は you を love する。」「ホラメデがミレチケとヘマシらしい。」といった文をへんな日本語と思っ
てはいけない。「基礎データは標準偏差及び相関係数を使用する。」という文も、構造的には「Me
は you を love する。」と、なにも変わらない。どちらも「○○は××を△△する」というかたちだ。○○
や××や△△のところには何が入ってもかまわない。格助詞とは、すべてを飲み込んでしまうブラックホー
ルなのである。

格助詞という便利な道具を使って、日本人は古くから外来語を日本語に取り入れてきた。江戸時代までは○○や××のところに漢語が埋め込まれていたが、明治期からは漢字やカタカナの姿を借りた西欧語が埋め込まれるようになった。そして明治期での西欧語の埋め込みの尖兵となったのが、翻訳文である。次の例をみてほしい。

2 トピックマーカである「は」を「てにを」から分離するという考え方は、従来の国文法でも採用されている。「てにを」などが「格助詞」と呼ばれるのに対して、「は」（およびその派生形である「も」など）は「取り立て助詞」と呼ばれる。ただしこの「取り立て」という用語にも問題がある。

3 正確に言えば、「が」と「を」と「の」については必ず「は」に置き換えなければならないが、「に」（および「へ」「と」「で」）については置き変えてもよいし、「は」を付加してもよい（「には」「とは」「では」）。なお、その他の格助詞（「から」「より」「まで」など）は「は」に置き換えることはできず、付加するしかない（「からは」「よりは」「までは」）。

4 これを最初に明確に示したのは三上章が1960年に発表した『象は鼻が長い』であった。それからすでに60年以上が経っているにもかかわらず、このことはいまでも学校では教えられていない。

総需要不足が上述した全過程を引き起こしたのとは逆に、総需要の増強は経済の回復に役立つことになる⁵。

典型的な翻訳文である。「総需要の増強は経済の回復に役立つ」のなかの「総需要」「増強」「経済」「回復」の各語は aggregate demand, increase, economy, recovery の翻訳語である。したがって、この文は以下のように書いても、原理的にはまったく問題はない。

aggregate な demand の increase は economy の recovery に helpful である。

こうした漢字仮名英語交じり文は、いまの日本の社会では受け入れられないことだろう。だが、これはこれで将来的な日本語のモデルとしては決して受け入れられないものではないということは、覚えておいたほうがよいだろう。

「がをにの」研究の歴史

「がをにの」（「てにをは」）は日本語の思考と構造の中核といえる存在であり、その本格的な研究はすでに江戸後期からはじまっている。たとえば、富士谷成章の『脚結抄』、本居宣長の『紐鏡』『詞の玉緒』などが、その研究書として有名である。

明治 30 年になって、大槻文彦がウェブスターに載っていた Murray の英文法を参考にして国文法（『広日本文典』）を完成させるわけであるが、それには「亅爾乎波（てにをは）」という用語が用いられている。ただし「がをにの」に対して「助詞」という用語が使われはじめたのは、大槻の『広日本文典』よりも以前のことである。大槻以前にも、小学校用の教科書として英文法を真似たかたちでいくつかの日本語文法がつくられていた⁶。これらの日本語文法は英文法からの直訳文法である。「助動詞」を類推させる「助詞」という（日本語の本質を完全に無視した）用語のルーツは、どうやらそこにあるようである。

「がをにの」が日本語のかなめの部分として再び認識されるようになったのは、「がをにの」が日本民族の思想運用上の様式を網羅している最も重要な要素であるとした山田孝雄の文法モデルからのことである。ただ、その山田にしても「助詞」というすでに定着してしまった用語を敢えて変えようとはしなかったようである。

それにしても、「助」詞こそが日本語で最も重要な要素のひとつだといわれても、多くの人にはなかなかピンとはこないのではないだろうか。そこで「心と言葉のグローバル日本語文法」モデルでは、「助詞」という用語はなるべく使わずに、「がをにの」という呼び方のほうをできるかぎり使うことにしている。

5 『スティグリッツ 入門経済学』第2版、p.365

6 『小学日本文典』(田中義廉、明治7年)、『日本文典』(中根淑、明治9年)

学校国文法モデルでの「がをにの」の扱い方

学校国文法モデルは橋本進吉の文法モデルをベースとしているので「助詞」の説明も橋本の「文節」構成による「主語-述語」モデルを踏襲している。そのなかで「助詞」とは「活用のない付属語」だとされており、「格助詞」とは「おもに体言について“文節関係”を示すもの」だとされている。具体的には、「～が」とは「その“文節が主語”であることを示す」助詞だとされている。

学校国文法の格助詞の扱い方のひとつの例として『くわしい国文法』（田近洵一編著、文英堂）という参考書に出ている格助詞の説明のまとめを、以下に挙げておく。

格助詞

語	意味
が	その文節が主語であることを示す
の	その文節が連体修飾語であることを示す その文節が主語であることを示す その文節が並列の関係であることを示す そのついた語を体言と同じ資格にする
を	対象、場所、時間、起点（出発点）、方向
に	場所、時間、目的、帰着点、相手、状態、結果、動作の出所（受け身）や目標（指摘）、原因・理由、比較の基準、並列
へ	方向、帰着点
と	共同の相手、結果、対象、比較の基準、引用、並列
から	起点、原因・結果
より	比較の基準、限定
で	場所、手段・材料、原因・理由、時限
や	並列

この表のなかで、たとえば、「を」は「対象、場所、時間、起点（出発点）、方向」を表し、「に」は「場所、時間、目的、帰着点、相手、状態、結果、動作の出所（受け身）や目標（指摘）、原因・理由、比較の基準、並列」を表し、「で」は「場所、手段・材料、原因・理由、時限」を表すとされている。またこの表では示されていないが、「が」は主語を表すだけではなく、「目的語」も表すことができる（AはBが好きだ。）。

機能や用例の集積が「意味」なのではない

このように、それぞれの格助詞は複数の意味を持つとされるのが従来の文法での基本的な考え方

である⁷。

しかし、はたしてそうだろうか。そうした言葉としての「機能」を集めたものが、その言葉の持つ本当の「意味」なのだろうか。私はそうは思わない。

私は、「が」には「が」の、「を」には「を」の、「に」には「に」の、「で」には「で」の、それぞれ独自の「意味」があるものとする。

それは言い換えれば、「～を」が対象や場所や時間や起点（出発点）や方向を表す、「～で」が場所や手段・材料や原因・理由や時限を表す、といった「機能的な意味」の根底に共通して存在する「このころの働き」のことである。そしてそうした最も根底的な部分の「意味」を捉ええず、言語としての機能的な意味だけを分析することに、私は反対である。もちろん、言葉としての「機能」の分析は必要だろう。しかしそれだけでは、「日本語のころ」⁸はつかめないのである。

「日本語の文」のところで述べたように日本語の文は 3 種類の基本構造を考えることができることから、ひとつの視点からの分析だけでは十分な分析ができない。いくつもの視点からの複眼的に考察を積み重ねることで、はじめてその本質に迫ることができる。

ここからは、そうした複眼的な観点から、いくつかの重要な助詞（「～は」「～が」「～に」「～へ」「～と」「～で」「～の」）について考察をしていく。

なお、日本語「文」における「和・漢・洋」の 3 つの基本認識構造については、「日本語「文」における「和・漢・洋」の 3 つの基本認識構造」、「がをにの」を含む日本語の各種表現については、「日本語の機能表現」をご覧ください。

☆☆☆

「～は」

「和・漢・洋」の「洋」（天/個の視点）からみた「～は」——「主語」を決める

「天・個の視点」での「～は」は、翻訳文体における「主語」を示すものである。

視点は、天上にいる話し手/書き手から下に向かっていく。聞き手/読み手は、話し手/書き手とは異なる別の場所で、天上から下に向けて地上の世界をみている。「～は」は、その地上の世界のなかのある特定のものを指し示す。これを「主体」(Subject)と呼ぶ。

この「～は」が示すものは、「主語」であり「主体」である（英語ではどちらも Subject と表現する）。この Subject が、「目的語」「客体」(Object) とのあいだになんらかの関係性を持つ。

もちろん、これは西欧の世界観なのであるが、それをそのまま日本語の世界に持ち込んだのが、この「天・個の視点」での「～は」である。下に、もういちど「天・個の視点」による文の基本構造を示しておく。

7 そのため、たとえば「場所」については「を」「に」「で」のいずれでも表すことができ（「日本を歩く」「日本に住む」「日本で暮らす」）、「起点」について「を」「から」のいずれでも表すことができる（「日本を出る」「日本から出る」）。

8 言語学者であれば、こうした意味のことを「認知的意味」などと呼ぶのだろうが、そう呼ぶことで、私の考える「日本語のころ」の表現からは少しずれてしまう。

「和・漢・洋」の「洋」（天・個の視点）による「文」の基本認識構造

修飾語	主語	修飾語	目的語	修飾語	述語動詞	修飾語
	～は ～が		～を ～に ～が ～は ～と 他	～で ～から ～まで ～より ～と ～に ～は 他	～する ～なる ～い 他	～らしい ～ようだ ～ね 他

現代日本人の頭の中は半分西欧思考

近代日本文明は、西欧の世界観を取り込むために懸命の努力を重ねてきた。そのために必要な試みのひとつであったのが、日本語の改革であり、その象徴的な例が大日本帝国憲法であった。

言葉の西欧化は、法律や行政の領域だけでなく、日本人のあらゆる知的活動に及んだ。文学の世界でも、1929年に井伏鱒二が『山椒魚』を以下のような文体で書いている。

山椒魚は悲しんだ。彼は彼の棲家である岩屋の外に出てみようとしたのであるが、頭が出口につかえて外に出ることはできなかったのである。今はもはや、彼にとっては永遠の棲家である岩屋は、出入り口のところがそんなに狭かった。そして、ほの暗かった。強いて出て行こうとこころみると、彼の頭は出入り口を塞ぐコロッポの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の体が発育した証拠にこそなったが、彼を狼狽させ且つ悲しませるには十分であったのだ。

「なんたる失策であることか！」

（『山椒魚』、井伏鱒二）

私はこの文章を高校生のときに国語の教科書で読んだ記憶があるが、なんとおかしい文体だろうと感じたのを覚えている。

このような翻訳文体が用いられているのは、もちろん国語の教科書だけではない。たとえば数学や物理の教科書の文章は、その大半が翻訳文体といってよい。私たちが学校で勉強するというのは、じつは西欧的発想を身につけることにほぼ等しいのであり、それはまた翻訳文体としての新しい日本語の使い方を学ぶことにも等しいのである。

こうして今の日本人は、翻訳文体を用いて西欧的思考を日本語によっておこなっている。そしてこの世界を主体・客体の対立構造として捉えることに違和感を持たなくなり、そこから生み出された思考を「～は」「～が」を「主語」として日本語で表現しているのである。

この意味で、現代日本人はすでに頭のなかの半分が西欧化しているといっていよう。そしてその半分西欧化した日本人の思考を表現するには日本語にも「主語」がなければならず、その西欧的発想における「主語（主体）」を示すマーカーのひとつが「～は」であると考えることができるわけである。

「漢」（天/共同の視点）による「～は」——「トピック」を決める

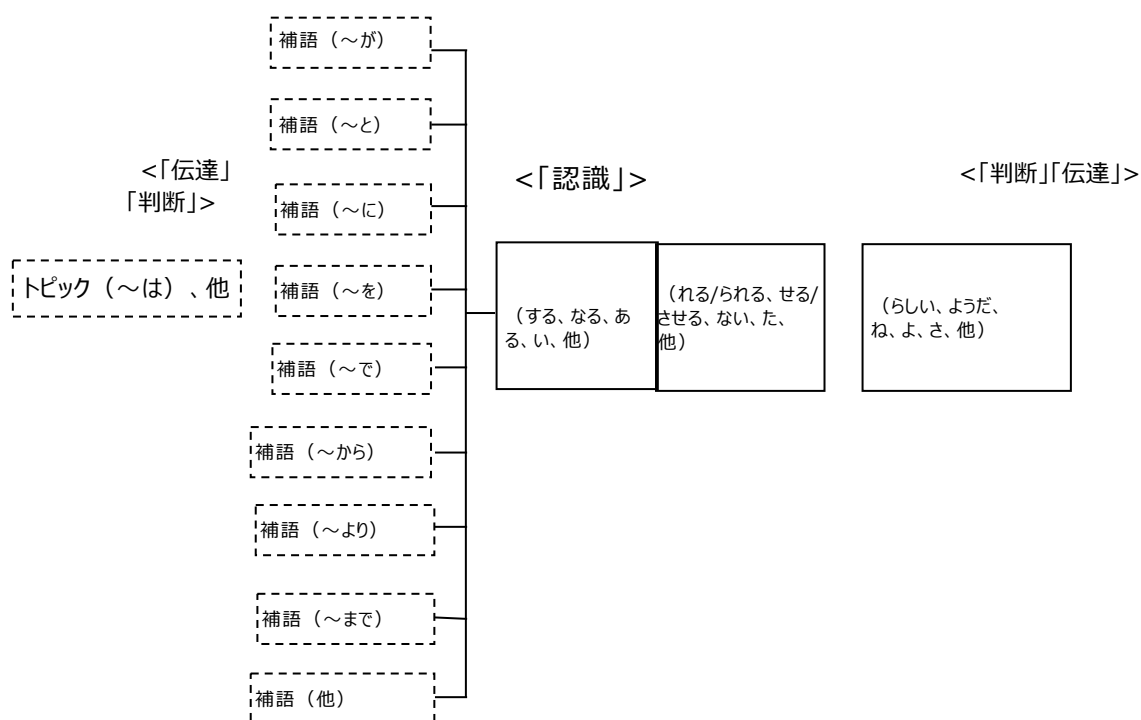
人間の視点は物理的には自分から離れることはできないが、心のなかでは自分の視点を自分の心から切り離して、いわば「客観的」にこの世界を捉えることができる。このようにして視点を天上においたもののひとつが「天・共同の視点」である。和漢洋という言い方からすれば、これは「漢」の部分にあたる視点であり、奈良平安の昔から漢文を通じて日本人の知性のなかに醸成されてきた視点である。

「天・共同の視点」では、話し手/書き手の視点は天上から下の世界へと向かっていく。聞き手/読み手は、その横にいて話し手/書き手と同じ方向をみている。

ここでの「～は」とは、話し手/書き手と聞き手/読み手の二人が一緒に注意を向けている物事を示すものである。これを「トピック」と呼ぶことにする。

下にもういちど「天・共同の視点」による文の基本構造図を挙げておく。

「和・漢・洋」の「漢」（天/共同の視点）による「文」の基本認識構造



「天・共同の視点」は話し手/書き手の心からは離れているので、話し手/書き手の心の動きを

生々しく表現することはない。

「天・共同の視点」での「～は」の文例をいくつか挙げておく。

象は鼻が長い。

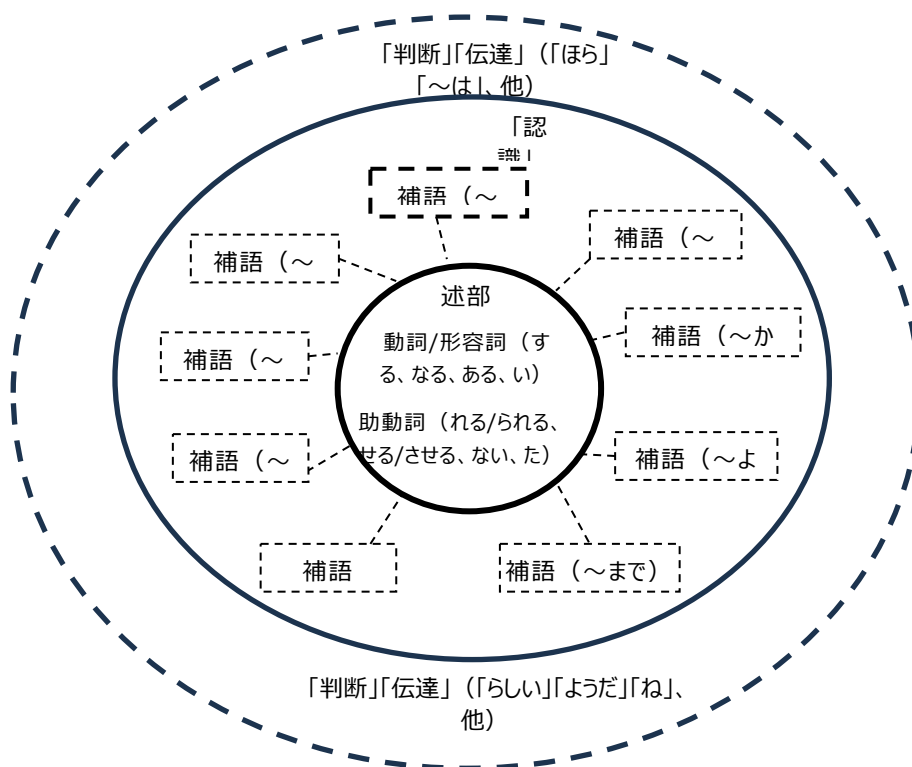
木曽路はすべて山の中である。

今期の売上は予想を上回った。

C. 「和」（人・共同の視点）による「～は」——共同でみる「場」を決める

「人・共同の視点」とは、話し手/書き手が自分の見たまま感じたままの世界を表現するものであり、聞き手/読み手はその横にあって同じ世界を共有する。その「人・共同の視点」から考える「～は」とは、話し手/書き手が何かの事態を表現する際の「場」を設定したいと考えたときに用いる言語表現である。「人・共同の視点」による文の基本構造をもういちど下に挙げておく。

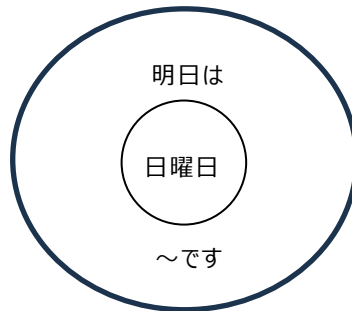
「和・漢・洋」の「和」（人/共同の視点）による「文」の基本認識構造



「人・共同の視点」からの文の基本構造図では、視点は話し手/書き手の目から正面に向かって
いる。聞き手/読み手の視点はその横にいて同じ方向をみている。

「～は」とは、その二人がみている、その「場」を設定するものである。たとえば「明日は日曜日です。」という文が意味するのは、話し手がまず「明日」という「場」を設定し、その場で述べる内容が「日曜日」だということである。

明日は日曜日です。



こうした「～は」の用例としては、たとえば次のようなものが挙げられる。

明日はカレーだ。
チョコレートは太る。
この負けは痛い。

実際には、私たちの普段の生活で交わしている日本語のほとんどの文が、この「人・共同の視点」からの文の基本構造によって組み立てられている。

私たち日本人は、まず心に浮かんだ「場」を述べ（「明日は」「チョコレートは」「この負けは」）、続いて、それについて心に思う浮かんだ心象を言葉にする（「カレーだ」「太る」「痛い」）。そこには主語/述語などといった意識はなく、またトピック/コメントといった意識も薄いはずである。

このことは日本語人であれば自分の心を素直にのぞいてみれば誰にでも分かることなのであるが、これまでの日本語研究ではこうした当たり前のことに目を向けずに、西欧からやってきた言語理論をもとに日本語の構造を解釈してきた。わざわざ西欧メガネをかけて歪んだ日本語像をみてきたのである。

☆☆☆

「～が」

「～は」と「～が」に対して私は長年の思い入れがある。もう40年以上前になるが、卒論のテーマが「日本語の『～は』『～が』と英仏語の主語との関係について」であった。特に「が」については「タロウはハナコが好きだ」「富士山がみえる」「健康が第一だ」といった日本語の「～が」を英仏語にどのように対応させるかを考えると同時に「すこし横道にそれるが、」「やってみたが、」といった「が」についても同じ「が」だとして考察した。それから40年以上がたって、考え続けてきたことがようやくそれなりのかたちにとまとった。それがこれから述べることである。

「～は」と「～が」

「～が」を考える際にどうしても行いたくなるのは、「～は」との比較である。音韻も似ていることから、「～は」と「～が」とは、なにか兄弟関係のような気がするものである。また形容詞や形容動詞つまり「美しい」「きれいだ」などの前で単独で使える助詞⁹は「～は」「～が」だけである。「富士山は美しい」「富士山はきれいだ」とはいえても、「富士山に美しい」「富士山できれいだ」とはいえない。なにによりも、いまの日本人には学校の英語の授業を通じて英語のセンテンスの主語に「～は」「～が」を対応させるという刷り込みがなされているので、その点から「～は」と「～が」を同種のものとして考えてしまおう。

だが実際には「～は」と「～が」とは、本質的に異なるものである。「～は」と「～が」が「主語」に対応するから兄弟関係であるといった感覚は、英文法からの借り物である学校国文法によって明治以降に培われたものであり、現代日本語の3つの基本形のうちのひとつとして機能するものの、日本語の本質ではない。では、「～は」と「～が」の本質はどのように違うのだろうか。

これも、「人・共同の視点」「天・共同の視点」「天・個の視点」という3つの観点から考察してみることしよう。

「洋」（天/個の視点）による「～が」——「主語」を示す

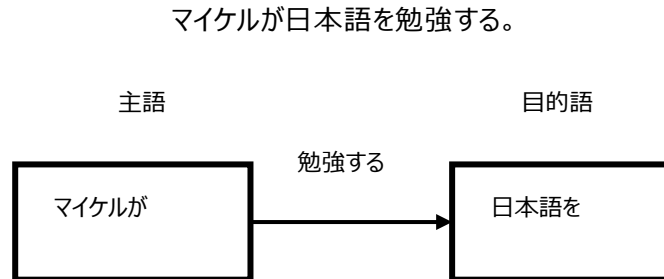
明治以降に日本語の世界には「天・個の視点」が導入された。その導入のツールである学校国文法では、西欧の世界観での「主語」を表現するものとして「～が」を対応させた。

学校国文法では、日本語の文は「主語と述語から構成される」と規定しており、その主語に当たる部分が「～が」または「～」で表現されるとしている。とすれば、「～が」は日本語文にとって特別な意味を持つ重要な成分ということになる。もちろん、これは西欧文法からの単なる受け売りであって日本語の実態には合っていないのだが、学校で公式にそう教えるのであるから善良なる日本国民はそれが正しいと思わざるを得ない。

さらには中学高校の英語授業で「主語には“～が”をつける」という刷り込みが日本人全員になされているため、「～が」が主語を表すものだとの認識は日本人のなかに強く浸透した。

9 「こそ」「さえ」といったものは除く。

たとえば、「マイケルが日本語を勉強する。」を「天・個の視点」から図示すると、以下のとおりである。



個と個の関係からみると「マイケル」が動作主であり「日本語」が被動作主ということになる。

ただ、このように「～が」を西欧の主語の概念の対応表現と考えてしまうと「タロウはハナコが好きだ。」「ここからは富士山がみえる。」「骨董収集にはカネがかかる。」といった日本語での「～が」の意味が説明できない。そこで学校国文法では「『～が』には他動詞や自動詞の主語を表す用法のほか、に自分の感情・感覚の対象を表す用法もある。」といった苦し紛れの説明をしている。このような苦し紛れの「用法」をいくら重ねてみても、日本語の本質に迫ることはできない。

重要なことは、日本語という言語が和・漢・洋の 3 つの世界観に対応するためにハイブリッド化してしまった言語だということを前提に分析を行うことである。そうすることでしか「～は」や「～が」の本当の姿を捉えることができず、それができないかぎり日本語と英語のあいだを自由に行き来することはできない。

「英文和訳体」が持つ意味

「～は」「～が」が英語の主語と同じという前提のもとに書かれた日本語を「英文和訳体」と呼ぶことにする。「～は」で取り上げた井伏鱒二の『山椒魚』の文はそうした英文和訳体文の一例であるが、ここでは文学ではなく学問領域からの文章を取り上げてみる。

マルクスが、マルクス自身の貨幣形態 D においては主体と客体とを「とりちがえ」る「間違った外観」が「固定」されてしまっていると主張したとき、そこでは商品世界の本来の主役はあくまでも貨幣以外の商品であり、貨幣とはこれらの主体全員によって客体としての位置を受動的に演じさせられているにすぎないということが、とうぜんのこととして前提されていた。

（『貨幣論』、岩井克人、ちくま学芸文庫、p.62）

この『貨幣論』の文章は非常に優れた英文和訳体の文章のひとつであるが、その最も優れた内容の日本語文によって展開されている思考が「天・個の視点」を基盤とするものであり、それを表現している文体が「英文和訳体」であることは、私たちに対してある重要な事実を示唆している。

すなわち、私たち現代日本人が近現代的な学問を行う際には「天・個の視点」による思考とその表出形態である「英文和訳体」文を用いることが適しており、実際、そうした文体を用いて学問的に優れた業績が多くつくられているという事実である。

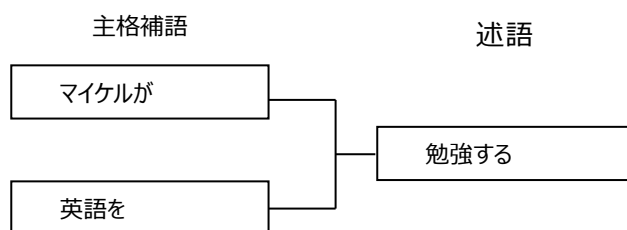
「～は」の解説で、現代日本人はすでに頭のなかの半分が西欧化していると述べたが、こと学問の世界に限っていえば、現代の日本人の頭のなかは半分どころから 8 割、9 割がすでに西欧化されている。少なくとも学問分野においては、現代日本語人は、もはや英文和訳体なしでは適切に思考し表現することができなくなっているのである。こうした観点からみて英文和訳体が現代日本語に占めている役割について私はプラスとして評価している。

だがその一方で、一部の日本語人のなかに根づいている、英文和訳体こそが優れた文体であってその他の日本語文体がそれに比べると劣った文体であるとの誤った認識からは抜け出さなければならぬ。明治維新から百数十年を経た現在でもなお、日本人の知性は英文和訳体に代表される西欧的世界観に支配されているといつてよいのであるが、そうした精神の隷属状態を脱して英文和訳体を本当の意味で私たちがうまく使いこなせるようになったとき、日本語ははじめて次の発展の段階を迎えることができる。

「漢」（天・共同の視点）からみた「～が」——「主格補語」を示す

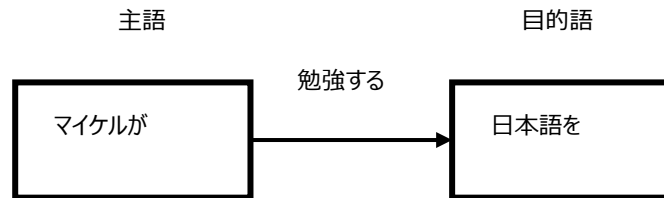
「天・共同の視点」からみた「～が」は、日本語文法でいうところの「主格補語」を表す。それは英語の「主語」と同様に動作等の主体を表す機能を持つが、日本語の場合には英語とは異なり、文のなかで特別な位置を占めているわけではなく、「～を」や「～に」などと同列の立場にある。そのため「主語」ではなく「主格補語」と呼ばれる。たとえば「マイケルが英語を勉強する。」という文を図示すると、次のとおりである。

マイケルが英語を勉強する。



ところで「天・個の視点」からみた「マイケルが英語を勉強する。」という文を図示は、次のようなものであった。

マイケルが日本語を勉強する。



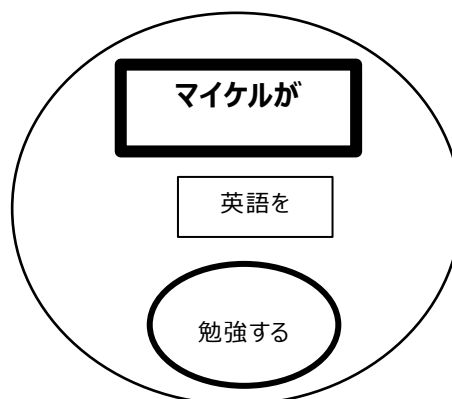
ここからは2つの「～が」の認識の違いがよくわかるが、しかしどちらにおいてもその視線については「天」から地上を見下ろしてのものであることには変わりはなく、次に説明する「人・共同の視点」からみた「～が」の話し手/書き手自身から見た視点とは根本的に異なることに注意が必要である。

「和」（人・共同の視点）からみた「～が」——「視線の行き所」を示す

「人・共同の視点」からみた「～が」の基本の働きは、「視線の行き所」（焦点）を示すというものである。「～が」を用いることで、「～は」によって設定された「場」のなかにある何かに視線がいてそこにスポットライトが当たり、それが「場」の中心であることを示すのである。

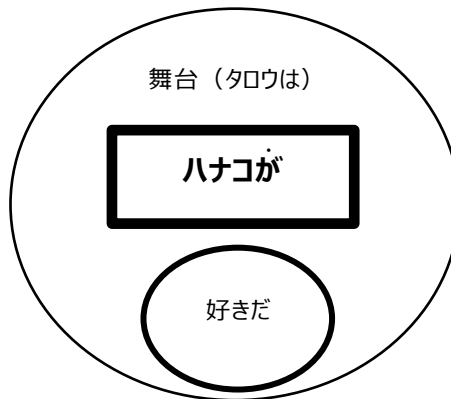
たとえば、「マイケルが英語を勉強する。」という文を「人・共同の視点」から図示すると、次のとおりである。

マイケルが英語を勉強する。

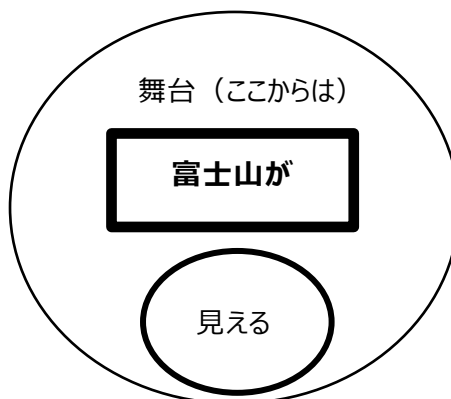


その他の例も挙げておく。たとえば、「タロウはハナコが好きだ。」「ここからは富士山が見える。」「骨董収集にはカネがかかる。」では、それぞれ「ハナコ」「富士山」「カネ」にスポットライトが当たっている。図にすると、以下のように表現できるだろう。比喩的にみれば、うす暗く設定された舞台（場）のなかで「～が」に対して視線がいてスポットライトが当たっている状態である。

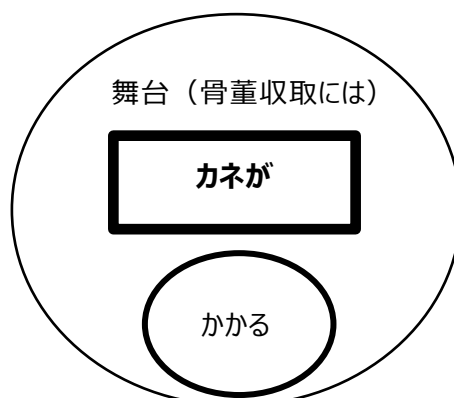
タロウはハナコが好きだ。



ここからは富士山が見える。



骨董収集にはカネがかかる。



「骨董収集にはカネがかかる」では、話し手/書きの視線の行き所は「カネ」である。聞き手/読み手は話し手/書き手の横に立って、同じように自分の視線を「カネ」に向けている。

同様の認識が「30 年以上も前になります」「すこし横道にそれる」「やってみたが」といった「が」にも当てはまる。「が」は、それまでの叙述内容（「30 年以上も前になります」「すこし横道にそれる」「やってみた」）にいちど視線を集めておいてから、その内容をその後の内容へと続ける。この働きは、渡辺実の文法論でいえば「再展叙」という機能にあたるものである。

☆☆☆

「～を」

「～は」「～が」に続いて、ここでは「～を」について 3 つの視点から考察する。

「洋」（天・個の視点）からみた「～を」

——2 つの実体間の影響-被影響の関係性を示す

「マイケルが日本語を勉強する。」を「天・個の視点」から図示すると、以下のとおりであった。

マイケルが英語を勉強する。



ここでは「マイケル」と「日本語」という 2 つの実体のあいだに「影響をおよぼす実体（影響主）」と「影響をおよぼされる実体（被影響主）」という関係性が想定されている。

このように、2 つの実体間の影響-被影響の関係性を示すのが「天・個の視点」からみた「～を」の機能である。この 2 つの実体のあいだの動作-被動作という関係性を英語文法では Subject-Object と呼んでいるので、日本語でも、この関係を「主語-目的語」というように呼ぶことにする。すなわち、ここでの「～を」は「目的語」を示すものである。

「和」（人・共同の視点）からみた「～を」

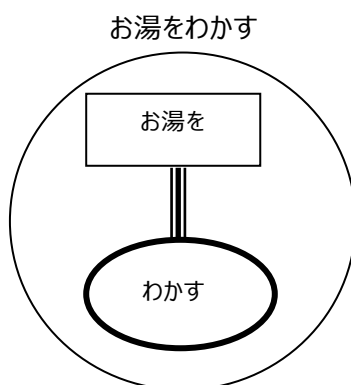
——場の出来事に直接関与するものごとを表す

「天・個の視点」からみた「～を」とは 2 つの実体の二項対立の関係性のひとつを示すものであった。しかし、これだけでは「～を」がもつ機能をすべて説明することはできない。

「人・共同の視点」から「～を」の機能を見てみると、それは心の中で浮かんだ場での出来事に直

接的に関係する何らかを示すものである¹⁰。

たとえば、「お湯をわかす」という文が示している「場の出来事」は「わかす」であり、それに「直接的に関係しているもの」は「お湯」だということである。図にすると、以下のようになる。



ここで重要なことは、「わかす」と「お湯」とのあいだには直接的な関係性はあるが、主体と客体の関係や原因と結果といった関係については特に想定されていない、ということである。

すなわち、ある「ものごと」について、話し手/書き手の心のなかで直接的な関与が認識できたときには、たとえそれが主体・客体関係でなくとも「～を」を用いるのである。

別の例を挙げると、たとえば「黒板」と「消す」とのあいだに直接的な関与があると話し手/書き手が認識すれば「黒板を消してください。」と表現する。「ご飯」と「炊く」とのあいだに直接的関与があると認識すれば「ご飯を炊きましょう。」という。

「のぼる」と「エベレスト」に直接的関与をそれほど認識しないときには「エベレストに登りたい。」と表現するが、両者のあいだに強い関係を認識するのであれば「エベレストに登りたい。」と表現する。ほかの山でなく、あのエベレストに登りたいのである。

「何がしたい」と「何をしたい」の違い

「いったい、何がしたいんだ？」と「いったい、何をしたいんだ？」という2つの表現のあいだの違いも、これでわかる。

「何がしたいんだ？」は、「したい」と考えている「何か」にスポットライトが当たっている（焦点化）。それに対して、「何をしたいんだ？」は「したい」と「何か」のあいだに密接な関係があることを示している（直接的関与）。この2つの表現は、その本質に違いがある。

ところが、この2つの日本語を英訳しようとするとき、いずれも同じかたちになる。主体・客体の認識では、こうした違いが表現できないからである。

10 なお「天・共同の視点」からみた「～を」の機能については「天・個の視点」での機能と「人・共同の視点」での機能の中間としておく。

いったい、何がしたいんだ？ / いったい、何をしたいんだ？
What do you want to do?

☆☆☆

「～に」「～へ」

到着点に向かう認識を示す

「～に」「～へ」は、到着点に向かう認識を示すものである。

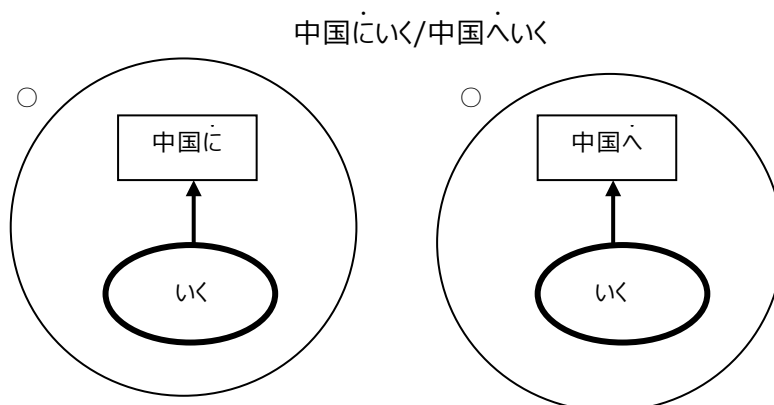
「～に」と「～へ」の認識の違い

「～に」と「～へ」はともに到着点に向かう認識を示しているが、そこには細かな認識の違いがある。具体的には「～に」には到着点とつながるという認識イメージがある一方で、「～へ」の持つ認識は到着点とつながるかどうかとは無関係である。

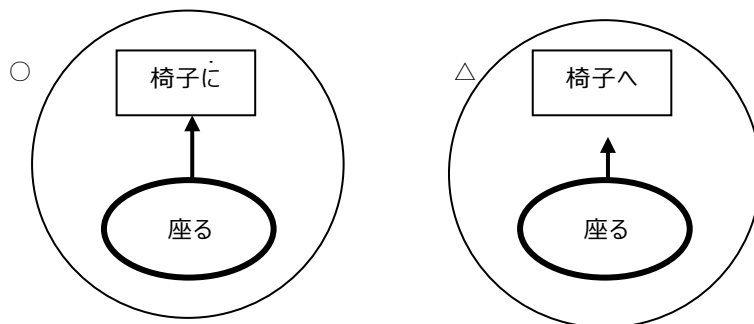
「翻訳者になる」と「翻訳者へなる」

たとえば「中国にいく。」と「中国へいく。」は、日本語としてどちらもおかしくない表現である。だが「椅子に座る。」と「椅子へ座る。」になると後者に対して少し違和感が残る。「椅子へ」では到着点（椅子）とつながる認識イメージがあまり明確でないからである。

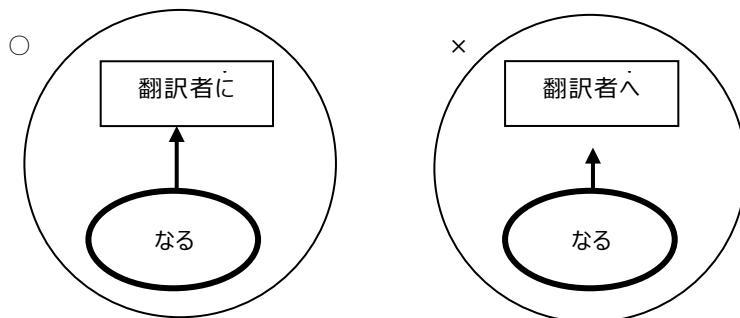
そして「翻訳者になる」と「翻訳者へなる」となると、後者は日本語としてそもそも成り立たない。「なる」という動詞には到着点（ここでは「翻訳者」）とつながる認識イメージが不可欠であるにもかかわらず、「～へ」には到着点とつながるイメージが希薄だからである。



椅子に座る/椅子へ座る



翻訳者になる/翻訳者へなる

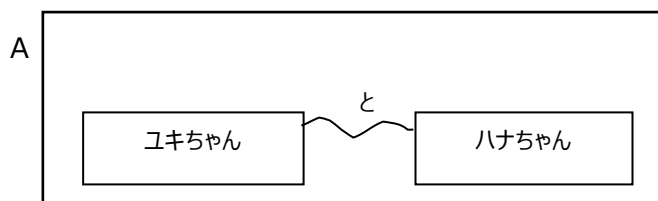


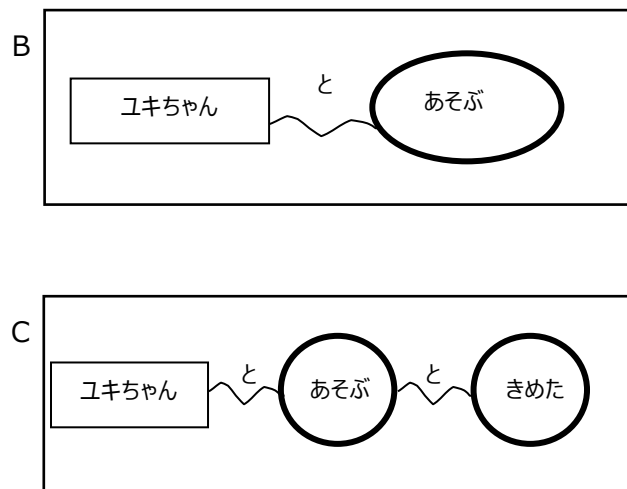
☆☆☆

「～と」

「和」（人・共同の視点）からみた「～と」——つながりの認識

日本語の世界認識における「～と」の認識イメージは「つながり」である。モノとモノが「と」でつながることもあれば（ユキちゃんとハナちゃん）、モノとコトが「と」でつながることもある（ユキちゃんとあそぶ。）。さらには、コトとコトが「と」でつながることもある（ユキちゃんとあそぶときめた。）。





A のモノとモノをつなげる「～と」は英語の and とほぼ同じ認識であるが、B と C の「～と」は英語の and とはイメージが重ならない。B の「～と」は with とイメージが重なり（play with Yukichan）、C の「～と」については関係代名詞節とイメージが重なることが多い（decide that I play with Yukichan）。

☆☆☆

「～で」

「和」（人・共同の視点）からみた「～で」——コトに対する補足情報をそこに置く

「～で」のイメージは、コトに対する補足情報をそこに置くことである。

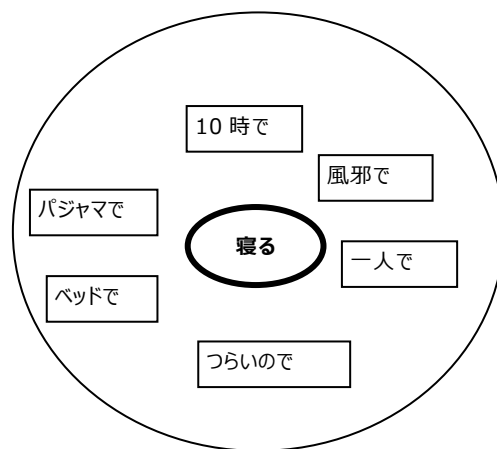
たとえば、「寝る」というコトに対しては、次のような補足情報が「～で」のかたちで表現される。

今日は、風邪で、一人で、つらいので、ベッドで、パジャマで、10 時で、寝る。

今日は

風邪で
一人で
つらいので
ベッドで
パジャマで
10 時で

寝る。



これらはすべて「寝る」に対する補足情報である（ベッドで：場所、パジャマで：服装、10 時で：時間、風邪で：理由/原因、一人で：状態、つらいので：理由/原因）。

「～で」がカバーできる範囲は非常に広い。コトの補足説明となることであれば、ほぼすべてを「～で」を使って付け足すことができる。

☆☆☆

「～から」「～より」

「和」（人・共同の視点）からみた「～から」「～より」——起点（はじまり）を示す

「人・共同の視点」からみた「～から」の機能は、事態に対する「起点」（はじまり）である。場所や時間の起点を表すこともあれば、なにかのコトの起点（理由）を表すこともある。

長崎から船に乗って神戸についた。

サービス期間は 1 月 10 日から 20 日まで。

いつも気をつけているから大丈夫。

やるからには徹底的にやろう。

「～より」の機能も「起点」であるが、「～から」を伴う事態には動的なイメージが感じとれるのに対して、「～より」を伴う事態は静的なイメージである。そこから「起点」の派生としての「比較」という用法が生まれる。

これより卒業式をはじめます。

赤より青がいい。

何もしないよりはみました。

よりよい方法を考えよう。

☆☆☆

「～の」

「～の」は、「がをにの」のなかでも「～は」と並んで特別な存在である。

「～は」は、その叙述内容のなかで何がトピックなのかを表す唯一のマーカーである。トピックマーカーは「～は」以外にはないので、ほかの「がをにの」のついた成分をトピック化しようとするときには「～は」に変更されて用いられる。

同様に「～の」は、その成分が体言（名詞）へと連体展叙するための唯一のマーカーである。成分を体言（名詞）へと展叙できるマーカーはただひとつ「～の」だけである。

これは日本語として非常に重要な特質である。たとえば英語では、多くの前置詞が連用展叙の機能と同時に連体展叙の機能も併せ持っている。次の例をみてほしい。

a love letter from Canada（カナダからの手紙）

Adventures in London（ロンドンでの体験）

Road to the victory（勝利への道）

後ろに添えた日本語とみると from は「からの」、in は「での」、to は「への」と、すべてに「の」がついていなければならないことがわかる。「から」「で」「へ」には連用展叙の機能しかないために連体展叙をするためには「の」の力を借りるしか他に方法がないのである。

それに対して from、in、to といった前置詞は、動詞にも名詞にも関係性を持つことができる（日本語的にいえば連用展叙も連体展叙もできる）ので、そのほかの要素を用いる必要はない。翻訳において from＝「から」、in＝「で」、to＝「へ」という単純な対応をしてはいけなことが、ここからわかる。

「～の」はすべての格関係に対応する

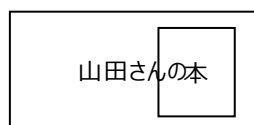
「～が」「～を」「～に」「～へ」「～から」といったさまざまな助詞が日本語に用意されている理由のひとつは、それが示す成分とその後にやってくる用言（動詞、他）との関係性、いわゆる「格」関係を明示するためである。当たり前だが、「山田さんが食べる」と「山田さんを食べる」では意味が違う。

しかし「～の」は、ある成分を体言（名詞）へとつなぐ連体展叙の機能を日本語のなかでただひとつ受け持っているマーカーであるから、すべての格関係に対応しなければならない。そのために、「～から」「～で」「～へ」などが示す格関係では「カナダからの手紙」「ロンドンでの体験」「勝利への道」となったのであった。そして「～が」「～を」などの場合には「山田さんが書いた本」→「山田さんの本」、「山田さんを書いた本」→「山田さんの本」というように「が」「を」が「の」に変化してしまう。この現象は、トピックマーカーである「～は」と、まったく同じものである。

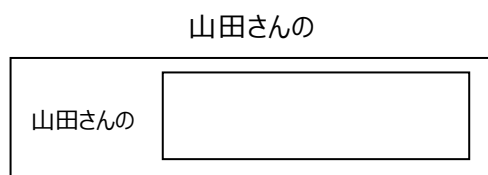
「～の」の機能——後続する名詞（体言）を支配する

このように格関係からみた「～の」は、すべての格関係を包括するマーカーといえるが、これを別の観点として考えると、「～の」の機能とは、後続するモノ（名詞）を支配することにあるといつてよい。

たとえば「山田さんの本」という場合には、「山田さんの」が「本」を支配する。



さらには「それは山田さんのです。」のように、後ろに認識目標となるモノが表現されていない場合もある。それまでの文脈のなかで目標となるものが何かについてすでに示されているためにそれについて敢えて表現しないケースと考えてよいだろう。図で示すと、最後の箱が空箱だと考えることができる。



目標となるモノの一般化がさらに進んでいくと、「そういうのは好きじゃない。」のように、目標となるモノゴトの背景的なモノゴトを提示というよりも、「の」そのものが目標となるモノゴトだと感じられるケースも出てくる。

演習問題

演習 1 「～は」への置き換え処理、「～は」の付加処理

問：以下の例を参考にして、自分でつくった日本語文（少なくとも 10 文）のなかの格助詞

～が	～を	～に	～へ	～の	～で	～と	～や	～まで	～から	～より	〇（空）
----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	------

（別添「日本語の機能表現」を参照）

を、トピックマーカー（提題助詞）の「～は」に置き換えるか、あるいは「～は」を付加するかをして、文を書き換えてください。そのうえで、その日本語の内容を英語で表現してください。

「の」→「は」

例：大阪の食べ物がうまい。→大阪は食べ物がうまい。

Osaka has many kinds of delicious food. / You can eat many delicious foods in Osaka.

「に」→「は」、「が」→「は」

例：鹿児島にいったことがない。→鹿児島はいったことがない。鹿児島にいったことはない。

I have never been to Kagoshima.

「で」→「は」

例：秋田で雪が降っている。→秋田は雪が降っている。秋田では雪が降っている。

It is snowing in Akita.

「から」→「からは」、「に」→「には」

例：長崎から船に乗って神戸に着いた。→長崎からは船に乗って神戸に着いた。神戸には長崎から船に乗って着いた。

Shipping at Nagasaki, I reached Kobe.

☆☆☆

演習 2 英語構文と日本語構文

学校英文法では、英語の Subject = 「～は」「～が」、Object = 「～を」「～に」、前置詞の from = 「～から」、before = 「～の前に」、after = 「～の後に」、などといった英日の対応関係を「暗黙

理」のうちに脳内に刷り込まれます。そしてこのことによって私たちは英語を英語として理解できなくなり、英語を英語として表現できなくなります。

この演習は、そうした刷り込みを抜け出すためのトレーニングのひとつです。このようなトレーニングを繰り返すことで私たちは、英語は英語、日本語は日本語、そのあいだに純粋な一対一の対応関係などない、という正常な感覚を取り戻すことができます。

問 A：例と同じように、「～が」が英文の（Subject ではなく）Object に当たる日本語文と英文のペアを、少なくとも 5 つつくってください。

例：大谷君は野球が大好きだ。

Otani-kun likes baseball very much.

問 B：例と同じように、「～を」が英文の Object には当たらない、あるいは Object に当たるとしても日本語とはずれている、という日本語文と英文のペアを少なくとも 5 つつくってください。

例 1：東京を歩こう。

Let's walk about in Tokyo.

例 2：お湯をわかしてください。

Please boil some water.

問 C：例と同じように、「～に」が英文の Object に当たる日本語文と英文のペアを、少なくとも 3 つつくってください。

例：近藤春菜は角野卓造（かどの たくぞう）に似ている。

Kondo Haruna resembles Kadono Takuzo.